

1

説明的文章(1)

◆指導ページ P.2～7◆

【指導のポイント】

- ★指示語・接続語に注意し、文のつながりをつかめるようにする。
- ★段落ごとに要点をつかみ、段落相互の関係を読み取れるようにする。

演習問題の板書例

<p>■テーマ 日本列島の変遷について</p> <p>■意味段落ごとの要点</p> <ul style="list-style-type: none"> ●日本列島は地球上でも「若い地層」 ←しかし 表面の岩石はもろい ←さらに 平野がほとんどなく、入り組んだ複雑な地形 ← 夏は大雨、冬は大雪をもたらす ← 豊かな自然と災害のおおひ国土を形成 <p>形式段落①～④</p>	<p>●「原日本人」のルーツ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・七万年前ごろ…日本列島は大陸と陸続き ← ・三万年前ごろ…大陸から大型哺乳類を追って人間も流入 ← ・約二万年つづく先土器文化…石器や動物の皮を利用 ← ●大型哺乳類と人間のドラマのはじまり ← ・一万七〇〇〇年前の最寒冷期をすぎること ← 地球はあたたかくなる↓海面は上昇 ← ↓一万年ごろ…大陸棚が完全に水没 ← 大型哺乳類(マンモスたち)は人間に狩りつくされる ← 人間はエサを失い絶滅するはず ←だが <p>形式段落⑤～⑩</p>	<p>●人間たちが生きのこった</p> <ul style="list-style-type: none"> ←なぜか 日本列島に雨が降るようになった ← ●日本に本格的な森林が誕生 ← 人間は木の葉など、森林からの恩恵により命をつなぐ ← ●「草原人間」から「森林人間」へと変化した <p>形式段落⑪～⑬</p>
--	--	---

復習問題の板書例

<p>■テーマ 群れから離れ、一人になり我に返ることの重要性について</p> <p>■意味段落ごとの要点</p> <ul style="list-style-type: none"> ●「宴の後」を考える ← 一人になって味わう感覚 ← ●「我に返った思い」にとらわれる <p>形式段落①～③</p>	<p>●群れない効用…我に返ること</p> <ul style="list-style-type: none"> 群れてばかり↓自分を見失う ← ときに群れから離れる↓自分を取り戻す ← ↓「群れていても自分を見失わない」という反論 ←だが ●群れには「同調圧力」がある ← 周りが違うと自信がなくなる ← 抵抗するのは容易ではなくなる ← ●群れに従う≠悪いこと ↓それができないと一人前の大人として認められない ← 自分がイヤになる ← 現代人の日常…まるで四六時中パーティーのよう ↓本当の自分を取り戻すことは難しい <p>形式段落④～⑫</p>	<p>●権力は腐敗する…注釈が必要</p> <ul style="list-style-type: none"> ←なぜか ●周囲の人間は群れて自分を見失う ↓権力者の言いなりになる <p>形式段落⑬・⑭</p>	<p>■筆者の主張</p> <ul style="list-style-type: none"> ●群れから離れること…自分を取り戻す唯一の方法 ← 我に返る ← 見えなかったものが見え、気づかなかったことにも気づく ↓元のあなたではない <p>形式段落⑮・⑯</p>
---	---	---	--

2

説明的文章(2)

◆指導ページ P.8～13◆

【指導のポイント】

- ★繰り返し使われる言葉などに注目し、話題をつかむことができるようにする。
- ★文章の構成をつかみ、要旨を捉えることができるようにする。

演習問題の板書例

■テーマ
イチジクとイチジクコバチについて

■展開
●イチジクとイチジクコバチの共生関係
・イチジクコバチ：イチジクの実(花)の中で卵を産む
・イチジク：イチジクコバチに花粉を運んでもらう
↓お互いに助け合っている
■共生

●イチジクとハチの研究
・イチジクの実のDNAを調査↓八〇〇〇万年前、イチジクは**1種類**だった
・イチジク中のハチのDNAを調査↓五〇〇〇万年前には**1つ**にたどりつく
ハチとイチジク：五〇〇〇万年間支え合い、共に生きてきた
= **■つまり**
長い間、共に進化してきた **■共進化**

●小さなハチの働き **■無意識の生命活動**
←
大きな森をつくった
■自然の中で大きな役割を担っている

■筆者の主張
・森林は大切なもの
・その大切な何百億本という森林をつくっているのはコバチである

復習問題の板書例

■テーマ
人間関係について

■展開
●ラジオ放送での主婦の相談
・感じ悪く話をやめさせる人 **■「ストップ！」**
↓「感じ悪くなく」その態度をやめさせる方法は？
■筆者の意見
感じ悪くやり返せばよい **■「ストップ！」**
←
やられたら、やり返す

●日本人 **■和を重んじる**
←
プラスなのかマイナスなのかわからないものを受け入れてしまう
↓「人間関係だから」：曖昧で情緒的
人間関係を数値化してとらえる方法 **■ギブ・アンド・テイク**
←
ドライに人間関係をとらえる **■損得勘定**
←
■つまり
人間関係 **■バランスシート**
常にバランスシートがプラスマイナスゼロになるよう、意識することが必要
←
■なぜか
↓人に嫌なことをされて放置すると、歪んだ関係性が固定化してしまう
■自分が下で相手が上

●「できる人」と「いい人」の違い
・「できる人」 **■歪んだ人間関係を許さない**
対等で健全な関係にもち込み、信頼を集める
⇔
・「いい人」 **■歪んだ人間関係を我慢してしまう**
←
自己嫌悪などに陥る

■筆者の主張
歪んだ関係の上で改善を重ねる ↓ 人間関係の悩みは根本的に解決できない
←
ギブ・アンド・テイクのテクニックで健全な対等関係を構築していくべき

文学的文章(1)

◆指導ページ P.14～19◆

【指導のポイント】

- ★情景、会話や動作から心情を捉えることができるようにする。
- ★場面の様子をつかみ、物語の山場を読み取れるようにする。

演習問題の板書例

● 読解の注目点
主人公・榎原英喜の心情の変化をたどる。

■ 榎原英喜の心情の変化

● 榎原英喜⇨野球からしばらく遠ざかっていた

← 社会人草野球チーム「ジンルイズ」の旗揚げを知る

← 閉じこめていた野球への情熱が抑えられない

← 草野球なら思い切り自分のプレイスタイルが出せる

↓ 野球を楽しめるかもしれない

← 実際、楽しく野球ができた…満足

⇨ しかし

● 監督・佐藤博行の言葉⇨「大リーガー級のセンスがある」

↓ 胸が熱くなって鳥肌が立つ…うれしい

佐藤博行の人物像

- ・ 只者ではない雰囲気⇨チームのみんなから一目置かれる存在
- ・ 野球素人ではなく、確かな観察眼の持ち主

← そんな佐藤博行が真面目な口調⇨信頼

榎原英喜の内心…中学で野球をやめたくなかった⇨後悔

草野球より上のレベルで野球をしたい⇨本音

← 「ちゃんと練習してみるか」とつぶやく⇨決意

↓ カットと身体が熱くなる…ざわつと身体が震えてまた鳥肌が立つ

● 内容の理解のポイント
具体的状況や人物の心情の理由、指示語の指す内容をおさえる。

■ 本文の場面
冬に向かう季節、教師の坂口は、生徒の賛同を得て、葡萄棚の下で、詩の朗読をすることを計画する。

■ 坂口の様子・行動・心情

● 坂口⇨生徒たちのばらばらな反応をむしろ楽しむ

← なぜか

無表情無反応よりずっとまじだと思ったから

● 朗読前の思わぬ労働：葡萄棚の下にできた水溜りの水を新聞紙に吸わせ、そのうえに青いビニールシートを敷くこと

生徒たち：頬を紅潮

坂口⇨イベントをやるのって、大変だけど楽しい

● 会場となった葡萄棚の下

- ・ 蛇のようにのびた茎
- ・ 変色した葉の隙間から漏れる陽光
- ・ 生徒らの髪や制服に飛び散る小さな光の粒

⇨ ひんやりとした小暗い、不思議な空間

● 坂口⇨生徒のキモイという声を聞こえないふりをして聞き流した

← なぜか

自分の詩を読むことに生理的な恥ずかしさを感じることが理解できるから

← なぜか

詩を書くことは悪事に等しいこと

← なぜか

詩はこっそり書くもので、坂口自身も秘密にしていたこと

← だが

恥ずかしさを突き破る生徒に期待。…おもしろいじゃないか

● 生徒の朗読：好きな詩人の好きな一篇

← 詩を探し出す⇨詩という行為のはじまり

坂口⇨静かに感動：坂口の詩への思いがうかがえる

復習問題の板書例

● 読解の注目点
主人公・榎原英喜の心情の変化をたどる。

■ 榎原英喜の心情の変化

● 榎原英喜⇨野球からしばらく遠ざかっていた

← 社会人草野球チーム「ジンルイズ」の旗揚げを知る

← 閉じこめていた野球への情熱が抑えられない

← 草野球なら思い切り自分のプレイスタイルが出せる

↓ 野球を楽しめるかもしれない

← 実際、楽しく野球ができた…満足

⇨ しかし

● 監督・佐藤博行の言葉⇨「大リーガー級のセンスがある」

↓ 胸が熱くなって鳥肌が立つ…うれしい

佐藤博行の人物像

- ・ 只者ではない雰囲気⇨チームのみんなから一目置かれる存在
- ・ 野球素人ではなく、確かな観察眼の持ち主

← そんな佐藤博行が真面目な口調⇨信頼

榎原英喜の内心…中学で野球をやめたくなかった⇨後悔

草野球より上のレベルで野球をしたい⇨本音

← 「ちゃんと練習してみるか」とつぶやく⇨決意

↓ カットと身体が熱くなる…ざわつと身体が震えてまた鳥肌が立つ

● 内容の理解のポイント
具体的状況や人物の心情の理由、指示語の指す内容をおさえる。

■ 本文の場面
冬に向かう季節、教師の坂口は、生徒の賛同を得て、葡萄棚の下で、詩の朗読をすることを計画する。

■ 坂口の様子・行動・心情

● 坂口⇨生徒たちのばらばらな反応をむしろ楽しむ

← なぜか

無表情無反応よりずっとまじだと思ったから

● 朗読前の思わぬ労働：葡萄棚の下にできた水溜りの水を新聞紙に吸わせ、そのうえに青いビニールシートを敷くこと

生徒たち：頬を紅潮

坂口⇨イベントをやるのって、大変だけど楽しい

● 会場となった葡萄棚の下

- ・ 蛇のようにのびた茎
- ・ 変色した葉の隙間から漏れる陽光
- ・ 生徒らの髪や制服に飛び散る小さな光の粒

⇨ ひんやりとした小暗い、不思議な空間

● 坂口⇨生徒のキモイという声を聞こえないふりをして聞き流した

← なぜか

自分の詩を読むことに生理的な恥ずかしさを感じることが理解できるから

← なぜか

詩を書くことは悪事に等しいこと

← なぜか

詩はこっそり書くもので、坂口自身も秘密にしていたこと

← だが

恥ずかしさを突き破る生徒に期待。…おもしろいじゃないか

● 生徒の朗読：好きな詩人の好きな一篇

← 詩を探し出す⇨詩という行為のはじまり

坂口⇨静かに感動：坂口の詩への思いがうかがえる

文学的文章(2)

◆指導ページ P.20～25◆

【指導のポイント】

- ★表現技法などに注意し、筆者独特の表現の特徴をつかむことができるようにする。
- ★事実と感想を読み分け、主題を読み取ることができるようにする。

演習問題の板書例

■本文の要旨

グレープフルーツの食べ方を例にして、アメリカの影響を受けたために、日本の従来の文化・風俗、環境が変わってしまったことについて述べている。

■展開

●グレープフルーツの食べ方⇨欧米ではスプーン

← 筆者⇨カルチャーショック、違和感を覚える

← しかし

グレープフルーツ⇨水分が多く、実が破れやすい

← そこでスプーンを使う…納得

← しかし

実が全部とれず残る…ストレス

⇨ あの食べ方は間違っている

← それとも

はじめから残してもいいんだという思想があるのだろうか？

●戦中・戦後の日本の道徳論

⇨ ご飯粒⇨「お百姓さんの汗の結晶」

⇨ 労働と文化は未分化

⇨ 破壊

●戦後に紹介されたアメリカの農業風景…広い農場、大規模な農業

⇨ 「お百姓さんの汗の結晶」とは思えない⇨労働は労働、文化は文化

← つまり

人生は一段と手間のかかるもの

⇨ 現在は、いちいちもったいないといっってはられない時代

復習問題の板書例

■筆者の話の進め方

筆者は、「仰げば尊し」と「別れ」について自分の体験を盛り込みながら具体的に話を進めている。

■展開

●明治以来の「仰げば尊し」の人气が落ちた三つの理由

①文語が難しいから

②先生への感謝の念を生徒に押しつけているから

③「身を立て名を上げ」…立身出世を奨励していて民主的ではないから

⇨

●それぞれの理由についての筆者の考え・反論

①文語は、豊穡な日本文学を産んだ言葉

← 難しくても教えていくべき

②押しつけがましいとは思わない

← 先生が生徒に、親が子に敬われる⇨人間のあるべき姿

③「身を立て名を上げ」⇨「大成する」

← 大成を望む⇨大きな志を抱く⇨どこに問題が？

← 大志を抱き頑張る子供 例大統領、プロサッカー選手、億万長者、大発明家

← 素晴らしいことであり、非民主的ではない

← むしろ

← 子供達が大志も抱けない社会⇨活力のない末期的な社会

●「仰げば尊し」で(筆者が)最も感動する部分⇨「身を立て名を上げ」

← そこを歌う様子⇨映画の「二十四の瞳」と同じ

●筆者が涙した本当の理由

← 歌詞の意味でも、先生、友達との別れでもない

← 「別れ」⇨そのものが悲しかったから

← 小学六年生⇨歌詞など分からない

← しかし

← 「仰げば尊し」で涙を流す

← 「仰げば尊し」⇨別れの悲しさを感じさせる歌

【指導のポイント】

- ★詩歌の種類や、短歌・俳句の特色をつかむことができるようにする。
- ★詩歌の表現技法を捉え、筆者の表したいことをつかむことができるようにする。

例題の板書例

四行の詩：簡単にできそうだが、四行で自分の思いや気持ちを表すのは大変

←しかし

チューリップ：四行でなくては表せないものを言葉でとらえる

←

作者(三好達治)の「眼」の確かさ

←

カメラのシャッターを切る瞬間

チューリップ

→

優しいたとえ

←

優しい観察眼 ≠ 鋭い眼だけでなく美しいもの、優しいものを愛する暖かいまなざし

・チューリップの花の形 → 「赤い部屋」

・羽音を立てて飛んで来た蜂 → 「客」

=

チューリップの赤い部屋に客として迎えられられるという童話ふうなタッチ

←

童話の一場面を想像させるような舞台

のどかな春

←

赤い花片も、そよ風にゆれている

←

春風にのって、甘い香りも運ばれる

←

蜂 = 王子様のように

←

赤い部屋の中には王女様がいるかもしれない

演習問題 1 の板書例

女の子 ↓ 毛虫が蝶に変身

男の子 ↓ つるつるのゆで卵がげじげじに変身

←

むすこがたどたどしくカミソリを使っている姿

←

初々しくてなかなかいい

←

むすこにひげが生えてきた

←

一人前の男の仲間入り

→

見ないようにして見ている父のまなざし

←

むすこを眩しく思い、口には出さない心の中の呼びかけが溢れている

若い幹

←

青年期に特有のしなやかな首すじ

+ 腕のつけね

+ ひきしまった胴

←

サラブレッドのようなからだ ↑ 気持ちよい

←

細胞のはげしい分裂活動、新陳代謝

←

彼らの四肢のあいだで小鳥たちがいっせいにさえずっているよう

鏡の中では潮がうねっている

←

息子の若さの光彩

父にだけ見えるダイナミックな黒潮

演習問題 2 の板書例

A 金色のちひさき鳥のかたちして

←

「銀杏の葉」

←

銀杏散るなり / 夕日の丘に

←

倒置法

Ⓢ 夕日の丘に銀杏散るなり

B 向日葵は金の油を身に浴びて

←

ゆらりと高し / 日のちひささよ

←

対象が持つ生命力を絵画的な遠近法を用いて描いている

C 牡丹花は咲き定まりて静かなり

←

花の占めたる位置の確かさ

D バスを待ち大路の春をうたがはず

←

季節(春)の到来を全身で感じ、その喜びを明るく高らかに歌っている

E 小春日や石を噛みいる赤蜻蛉

←

水に入ることくに蚊帳をくぐりけり

←

芋の露連山影を正しうす

←

厳しく荘厳な対象の姿を格調高く歌っている

【指導のポイント】

- ★歴史的仮名遣いや古語など、古文の特色がつかめるようにする。助詞や言葉の省略に注意する。
- ★漢文の読み方や漢詩の種類をつかみ、理解できるようにする。

例題の板書例

徒然草

鎌倉時代に兼好法師(吉田兼好)が書いた随筆集。仏教的無常観と古き良き時代への懐旧の情が色濃く表れている。

重要語句

- こはき↓こはし：手ごわい。強情だ。
- 心にかかる：気にかかる。
- 馳す(馳せる)：走らせる。

吉田 馬乗り

馬に乗る秘訣 ←

馬というものは、みんな簡単に従わないものである。人の力では、とても争うことができないものではないということを知っておかなくてはならない

←

① 乗ることになっている馬をまずよく観察

←

強いところや弱いところを知っておく

←

② 轡や鞍などの馬具に危ないところがないか
点検

←

気になるところがあれば馬を走らせない

←

①・②の心配りを忘れない者

←

本当の馬乗り =

演習問題 1 の板書例

東海紀行

江戸時代に井上通女が書いた紀行文。丸亀(香川県)から江戸への旅の様子が書かれる。

重要語句

- ほのほの：あけぼののうす明るいようす。
- あやうき↓あやうし：(今にも崩れ去りそう)で心にかかる↓粗末な。
- 白妙：白い色。

二十五日、夜中出発

←

続松(松明)をともして行く：雪がまだ降っている

←

二里ほど歩いた：夜もほのほの明けた

←

松の上

←

刈り取りのすんだ田

←

粗末な家の垣根

←

いとをかし たいへん趣深い

←

一面白一色 雪景色 が朝の光にまじりあっていく情景

←

この世でない所を歩いているような気持ち 感動

←

故郷ではほとんど雪が降らない：珍しく思える

←

しかし

←

早く晴れてほしい

←

午前十時過ぎ

←

雪がやみ、太陽が明るくさし始めた

←

一行 喜んで旅を続けた

演習問題 2 の板書例

漢詩の種類

- 絶句：四句からなる。
- 五言：五言絶句・七言：七言絶句
- 律詩：八句からなる。
- 五言↓五言律詩・七言↓七言律詩

買島 鳥は宿る 池中の樹

←

「僧は推す」 月下の門

←

「僧は敲く」

←

知らずに偉い人の行列に突っこんでしまった

←

京兆の尹

←

長安の長官 大臣にも匹敵する高官

←

「無礼者」とひととらえられた

←

京兆の尹 韓退之(韓愈)

←

文章における唐宋八大家の筆頭

←

詩人としても第一流の人物

←

事情をきくと一緒に考えはじめた

←

「僧は敲く」の方がよい

←

理由

←

推す：来訪者を待っていたことになる

←

敲く：月下をさまよっているうちに、ふと友人を訪ねる

←

おもむきがある